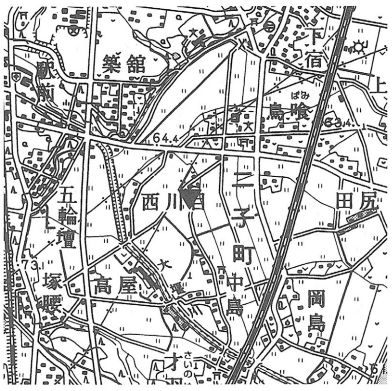
岩手・西川目（にしかわめ）遺跡

1　所在地　岩手県北上市二子町西川目
2　調査期間　二〇〇三年（平15）四月～七月
3　発掘機関　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
4　調査担当者　西澤正晴・小針大志
5　遺跡の種類　集落跡・墓地
6　遺跡の年代　九世紀・一〇世紀、一八世紀
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

西川目遺跡は、北上市市街地の北西に位置し、北上川やその支流によって形成された自然堤防上に立地する。付近には同様の自然堤防が沖積地より一段高い地点として島状にいくつかあり、それぞれに古代を中心とする遺跡が立地している。調査は圃場整備事業に伴って実施されたものである。



（北　上）

検出した主な遺構は、平安時代の竪穴住居・掘立柱建物・水田、近世の掘立柱建物・墓壙・井戸などである。

遺跡の中心は平安時代の集落で、竪穴住居を主体とするが、注目されるのは三面廂をもつ掘立柱建物や、倉庫と想定される総柱の掘立柱建物が検出されたことである。官衙以外からこのような建物が見つかることは稀であるため、通常の集落とは性格の異なった遺跡として把握できる。近世の遺構はこれらの遺構と同一面から検出されるが、重複はあまり認められない。

遺物についても平安時代が中心で、須恵器や「田主」と刻書された杯をはじめとする土師器、鉄鏃などの鉄製品、多量の土錘などが出土している。

近世の遺構のうち墓壙は一〇基検出されたが、そのうち九基が重複している。隣接して同時期と考えられる掘立柱建物、井戸が位置しており、民家、井戸、墓の構成がわかる数少ない例である。

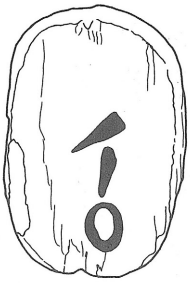
木簡は、江戸時代に属する墓壙ＳＺ〇五の棺内から一点出土した。共伴する遺物にはキセル・寛永通宝・火打ち鉄がある。

墓壙ＳＺ〇五の平面形は隅丸方形を呈し、底面に方形の組合式の棺が設置されている。木棺は側面の一部と底面の材のみ遺存していた。また、この墓壙は重複する墓壙群とは溝を挟んで単独で位置し、しかも埋葬方向も九〇度異なっている。時期は出土した遺物から一八世紀を中心とした年代が想定できる。

8　木簡の釈文・内容

(1)　「イロ」　72×45×10　065

用途不明の木製容器に墨書されたものである。楕円形をした二枚の板を天（底）板として、両者を木の皮で包みこんで、容器状としたものと考えられる。片側の材に墨書が、もう一方には朱漆が施されていた。遺存状況はあまり良くないが、底材の内側に墨書されていたものと考えられる。腐蝕により欠失している部分もあるが、おそらく完形に近いと思われる。釈文では片仮名と解釈したが、あるいは何らかの記号の可能性も考えられる。いずれにせよ、本地域ではあまり類例のない遺物であり、名称、用途とも不明である。



9　関係文献

西澤正晴・小針大志『西川目・堰向Ⅱ遺跡発掘調査報告書』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書四六四、二〇〇五年）

（西澤正晴）